
転生+チート+オリ主でjump

FAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生＋チート＋オリ主でjump

【Nコード】

N3701Z

【作者名】

FAI

【あらすじ】

この作品はだいたいコメディ、ちょっぴりシリアス、ハーレム、チート、ご都合主義の提供でお送りします。主人公最強です。原作ブレイク、アンチ要素なども満載です。処女作なのでうまくかけているかわかりませんがそこは大目に見て下さい。

＞あらすじ＜

オリ主こと紅春希は18歳の高校生。その日も学校が終わり、帰宅するはずが車にはねられ死亡した。だがしかし、春希は天界に飛ばされていて・・・目を覚ますとそこには最高神と名乗るジジイがい

た。

結婚・・・しちゃった♪

side.. 春希

「・・・どこだここ？」

目を覚ますと、そこは知らない場所だった。一面真っ白で、どこまでつづいているのかもわからない。

「・・・・・・・・??????」

「ここは天界じゃよ。お主は死んでここに飛ばされてきたんじゃよ。」

「誰だよジジイ？」

声がしたほうを向くと、そこには・・・ジジイがいた。

「ワシか？　ワシは最高神じゃよ。」

「そうかあ、神かあ・・・」

俺はなぜかこの言葉が本当のことだとわかった。

「疑わんのか？」

「まあ自分が死んだっていう記憶はあるしな。それよりなんで最高神のジジイが俺の前にいるんだ？」

「それなんじゃがなあ、何かの手違いでお前さんが死んでもうたのでじゃな、お前さんとおある世界に特典つきで転生させてやろうと思うのじゃが、どうじゃ？」

「場所を選べるのか？」

「うむ。どこが良いかの？」

「じゃあネギまの世界で。」

「特典は何が良いかの？なんでも良いぞ？」

「うーん、じゃあ歴代ファイナルファンタジーの技、能力、武器、召喚獣全部使えるようにしてくれ。それと気と魔力の限界は無しで。それにあらゆる魔法の知識とそれを使用可能に。加えて完全記憶能力とアカシックコードへのアクセス権限と甲型ルシと乙型ルシを合わせたような力。あと、容姿を自由に換えられるようにして不老不死で。今言ったの全て副作用なしでできるように。」

「素の能力はどうするんじゃ？」

「容姿は【紅】の紅真九郎で、気はラカンの20倍で魔力はナギの20倍で。」

「それで良いのか？」

「まだ大丈夫なら従者として【魔法少女リリカルなのは】のなのはとフェイトを頼む。」

「了解じゃ。それじゃあ送るぞ、良いな？」

「ああ、大丈夫だ、問題ない。」

「じゃあ、頑張るんじゃぞ？」

ジジイがそう言った途端、今立っているところの床がなくなり、俺は落ちていった。

今、俺は絶賛落下中。

「なんで俺は落ちてるんだーっ」

ジジイはなぜか俺を空中に放り出したようだ。もう目の前まで地面が迫ってきており、俺はどうすることもできずに地面に激突し、そして意識を手放した。

「おい、大丈夫？」

「……ん？」

「あゝ良かった、やっと目が覚めたんだね。大丈夫？」

目を覚ますとそこにはジジイじゃなくて……なのはとフェイトがいた。

俺は思わず、

「(ガバツ

結婚して下さいっ。」

プロポーズしてしまった。

「「ええっ##」」

驚いて顔を赤くする二人。
沈黙してしまった。

「ごっ、ごめんね、驚かせちゃって。と、とりあえず自己紹介しようよ。俺は紅春希。春希ってよんでね。よろしくね。」

「わたしは、高町なのはです。なのはって呼んでね、春希くん。」
と笑顔のなのは。

「フェイト・テストロッサです。……春希でいいかな？」
少し不安そうに聞くフェイト。

俺がいいよと答えると、

「わたしも、フェイトでいいよ#」

と少し恥ずかしそうにするフェイト。

仕事以外であまり同年代の男性との付き合いがないフェイトは、少し照れながら言う。

「うん、よろしくね、フェイト。」

（〜っ、可愛いっ、フェイト可愛いよフェイトっ狙ってやってないところが恐ろしいけど、可愛いからOK）
と俺は内心悶えながら、

「よろしくね、なのは、フェイト。」

と平静を装いながら二人と握手をした。

そして、自己紹介の後、どれだけお互いのことを知っているのかを話そうとしたところで、なのはが、

「あのっ、はい、これ春希くんに神様から渡してくれて頼まれてたんだ。・・・ちょっと忘れかけてたけどね。」

と手紙を取り出した。

春希は手紙を見ると、

《言い忘れとったが、従者の二人はお主と気と魔力はほぼ同じで不老不死にしていたからの。お主もずっと一緒にいたいじゃろうからの。それにお主と仮契約もしくは本契約した場合もその相手が不老

不死になるからの。これはワシからのプレゼントみたいなもんじゃから気にするな。それと三人とも肉体操作ができるようになってからの。ちなみにその時代は大戦の100年ほどまえじゃから存分にかつやくしてくれい。

P・S・

ダオイラ魔法球をいくつか二人に渡してあるから是非活用してくれい。》

と書いてあった。読み終えたので二人に渡して、（神様って親切なんだなあ〜）と思った。

二人が読み終わり、まず二人に言いたいことがあったので言った。

「二人共、ごめんなさい。」

と頭を下げた。

二人はなぜ謝られるのかがわからなかったので理由を聞くと、

「俺のわがままで二人の了解も得ずに勝手に従者にして、しかも不老不死にしちゃって、これからホントに長い時間を生きてたくさん辛いことがあるだろうから、だからごめんなさい。」

もし嫌だったら、どうにかして神様に連絡をとって取り消してもらうようにお願いするから。・・・だけど、よければ俺のわがままだけど、これからずっと一緒にいて欲しい。」

二人はなぜ春希が謝ってきたのか理解した。
そしてなのはが、

「どうして私たちを従者に選んだの？」
と聞いてきた。

フェイトも気になるという風に頷く。

俺は少し照れながら、

「二人のことが大好きだからだよ。だからさっきも二人を見た途端にプロポーズしちゃったんだ。」
と答えた。

「ドキッ##」

二人はまた赤くなってしまった。

二人は少し落ち着くとなのはが右手を握って笑いながら、フェイトが左手を握って香りを赤らめながら、

「春希くん、よろしくね。」

「春希、・・・よろしく#」

と言ってきた。俺は二人の反応の違いに少し驚きながらも、許してくれた二人に感謝した。

すると、フェイトが、

「春希、・・・さっきの・・・その、プ、プロポーズって、本気にしているの?」

と聞いてきた。

なのはも「どうなの？」というような顔をした。
俺は、

「うん、本気だよ。だからもう一度言います。なのは、フェイト、好きです、俺と、結婚して下さい。」

と改めてプロポーズした。

二人は顔を真っ赤にして、

（うう、春希くんがあまりにもアレだったら、少し頭を冷やしてもらうんだからっ）

となのはは少し魔王化し、

（春希・・・浮気は・・・ダメだよ？・・・でも春希カッコいいからしかたないのかなぁ？うう、ちゃんと見張っておかなきゃ）
とフェイトは、少し黒いオーラをだしていた。
そして二人は、春希に抱きつき、

「春希」

「春希くん」

「「幸せになろうね♪」」

と同時に言った。春希も、二人をしっかりと抱きしめて、

「ああ、幸せになろう!!」
と言った。

設定

＞紅春希＜♂

年齢…18歳（死亡時）

神様の手違いによって死んだ高校3年生。性格は結構アバウトで大膽。でもやるときはなにがなんでもやる。

頭は完全記憶能力により一度みると覚えてしまうためかなりいいが、ふざけてなのはやフェイトに怒られることもしばしば。

趣味は多種多様だが、イチバンは料理と音楽演奏。

物事を人に教えるのは得意なほうで、2歳下の妹によく料理を教えていた。

鈍感では無く、好きな人には好きだとハッキリ言うが、複数の女性に対して好きになってしまったため、相手が増える度に妻達にボコボコにされる。案外恨まれることはない。

服装には結構気を遣い、お金はかけるほう。

能力…完全記憶能力

召喚獣

歴代ファイナルファンタジーの技全て

この世のあらゆる魔法

ルシの力（ルシの証は右肩にある）

不老不死

肉體操作及び強化

精神強化

戦闘方法…基本的になんでもできるのでキャラを選んでキャラになりきって戦うことが多い。お気に入りにはスコール、セシル（聖騎士）、ライトニング、ティータの4人で、他はほぼ使わない。相手の数が多いときは、召喚獣を多数召喚したり、殲滅魔法を打ちまくったりする。あまり殺すのには躊躇いはない。対人戦の模擬戦などではエースのようにカードで戦うこともある。称号は《獅子王》・《百獣の王》

武器…ライオンハート（スコールの使う銃剣？）

ライトブリンガー（セシルの使う槍）

グングニルブレード（ライトニングの使う銃剣）

ワールドチャンピオン（ティータの使う剣）

最後の切り札（エースの使うカード）

の5つが主。

使う召喚獣…バハムート零式

オーデイン

アレキサンダー

真竜

の4つが主。複数同時使用可能。

＞高町なのは＜♀

年齢…18歳

フェイトとともに春希の希望により従者かつ嫁になる。

能力…不老不死

肉体操作及び強化

精神強化

魔王化（ヤン度MAX）

戦闘方法…春希に教えられたため、春希と同様になんでもできるが、春希いわく魔法で遠距離の弱点は消せるため、接近戦で圧倒的な火力をみせるジェクトのような戦い方をして欲しいらしく、そうしている。本人も楽しいのでそれでいいらしい。称号は《爆炎の白い戦乙女》

武器…シンの牙（ジェクトの大剣）

使う召喚獣…死の天使ザルエラ

ブリュンヒルデ

>フェイト・テストロッサ<♀

年齢…18歳

なのはとともに春希の希望により従者かつ嫁になる。

能力…不老不死

肉体操作及び強化

精神強化

死神化（ヤン度MAX）

戦闘方法…なのは同様春希に教えられたためなんでもできるが、春希いわくなのはとフェイト二人ともに格闘系の戦い方をして欲しかったために格闘の得意なティファを選んだ。もちろん魔法も使う。称号は『神速の黒い戦乙女』

武器…セブンスヘブン（ティファの使う格闘武器）

使う召喚獣…オメガ

フェニックス

設定（後書き）

アーティファクトはなのはとフェイト以外はFFの武器でいこうと思っていますが、なのはとフェイトは多分オリジナルでいくとおもいます。

修行、からのゝ大戦へ突入☆（前書き）

修行はほとんど飛ばします

修行、からのゝ大戦へ突入☆

side…春希

そういえば、神様が魔法球二人に渡しといたっていったよな。うん。

「なのは、フェイト、魔法球全部出して。」

「「うん、わかった。」」

そして二人は、それぞれ2個づつ魔法球を取り出した。

4つのうち1つは修行専用にして、時間設定を現実の1時間が1日になるようにし残りは今後のためにとっておいて、とりあえず50年すなわち1200年分の修行をした。

そして修行を終えた頃には、三人とも魔力はナギの100倍を超え、気力もラカンの100倍を超えて、全ての魔法を自由に扱えるようになり、春希は召喚獣数体を時間無制限にだしながらふつうに戦える程にまでなった。春希に教わり、なのはとフェイトも召喚獣が扱えるようになったし、歴代ファイナルファンタジーの技も全て使えるようになった。

修行を終えた三人は、大戦の時期までまだ余裕があるので、大戦についての情報を逐一集めながら魔法世界と地球のすべてを新婚旅行としてまわることにした。修行はいちゃつくのを禁止していたために、その分まで満喫していた。

もちろん、大人な時間もたっぷりとすごしたわけで、春希はなのとはフェイトの二人としっかりと本契約をしていた。

二人曰く春希は激しいらしく、初めての頃は「死ぬかと思った。」らしいが、最近はなんとか二人がかりでやっとなについていけるようになったらしい。

春希が、「二人は最高だよ」と、満面の笑みを浮かべていたことは余談である。

旅の途中では、のちの《紅き翼》のメンバーの1人であるゼクトにあって意気投合し、何カ月かともに旅をしたり、なのはやフェイトにナンパをしてくる奴らをボコボコにしたりして、あつという間に

時が経った。

大戦が始まっているのにもかかわらず、現在三人は、ヘラス帝国の首都をぶらぶらと歩いている。

「ねえ春くん、私たちって大戦に参加しなくてよかったの？」

「そういえば、今って魔法世界は戦争中なんだよね。」

「でも春くん、戦争への介入するって言ってなかったっけ？」

「うーん、最初はそうしようと思ってたんだけど、なんか旅をする間に二人と過ごす時間が楽しくなっちゃって。巻き込まれない限りは、できれば二人とずっとイチャイチャしていたいかな。」

「うん、……わたしも春希とイチャイチャしてたいな#」

「そーだね、わたしもフェイトと同じかな。」

とほのぼのと会話をしていると、突然、

「あぶっっ」

と一人の少女が、春希に降ってきた。そしてとっさに春希はお姫様抱っこでキャッチ。

「「へっ？」」

と呆然とする二人。

すると少女は、

「／＼／＼ い、痛いじゃ。」

と痛そうに呻くも、この状況に気づくと顔を赤らめ、

「あ、ありがとうなのじゃ。／＼」
といきなり春希にキス。

今度は春希が驚き、キスされたことでほわとした顔をする。

「はるるるるん／＼　／　はるる／＼」

と春希に詰め寄る二人。
すると、

「お主ら、ちょっと助けてくれぬか？」

と言って少女は今度は春希に抱きついた。

困惑する春希に、青筋をたてて黒いオーラを出す二人。相変わらず抱きついたままの少女。しかし、三人は、何時の間にか周りを黒服の男達に囲まれていることに気付く。どうにか穏便にことを済ます方法を考えようとする三人。

すると、黒服の男のうち一人が、

「あの、・・・そのお方を渡していただけませんか？」

と言ってきた。その言葉に、なにやらこの少女は身分の高い女の子であり、春希は自分達が面倒事に巻き込まれそうな気がしたのでさっさと引き渡そうとすると、少女はこう言った。

「うむ、帰るぞ。じゃがこの者達に迷惑をかけたのじゃ、詫びをしたいからこの者達も連れて帰るぞ。」

「いいいいいよ、詫びなんて、そんな迷惑とかじゃないし、遠慮させてもらうよ。」

と春希が言うも、

「だめじゃ、付いてこぬというのなら、また逃げるのじゃ。」
と理不尽なことを言われ、さらに嫁二人に、黒服の人達が不憫だから行こうと言われ、しぶしぶいくことにする。

すると少女はフードを脱ぎ、

「妾はテオドラ・パシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア、ヘラス帝国の第三皇女なのじゃ。名前は長いのでテオで良いぞ。」と挨拶した。春希は予感が当たり、面倒なことになったと頭を抱えていた。そんな春希を二人は苦笑しながら見て、テオドラは春希を引っ張って城へと急かした。

三人は城につくと、部屋に案内され、テオドラは着替えてくるというので、これからのことについて相談していた。

「二人は原作知識はあるんだよね？」

「うん、春くんに会う前に神様に教えてもらったよ。」

「春、やっぱりテオと知り合っちゃったから私たちも戦争に参加することになるのかな？」

「そうだね。二人もテオが危ない目にあうんだったらやっぱり助けたいと思うよね、たとえば大丈夫とわかってても。」

「「当たり前だよ？」」

「じゃあ、そういうことで。頑張ろうね、なのは、フェイト♪」
と三人は、次の目標を決めた。
だがしかし、そこで話は終わらなかった。
いきなり二人は黒いオーラを出し始め、

「「ところで春^{くん}？」」

と春希にじりじりと詰め寄る二人。

「ハイ、ナンデショウカ。」

と震えながら正座をする春希。

「「なんでさっきはテオにデレデレしてたのかな？# まさか・・・」」

「ち、ち、違うよ？決してテオが可愛かったとか柔らかかったとかじゃ・・・ハッ(汗)」

「「ほうう##」」

「す、すいませんでしたっ。」
勢いよく土下座をする春希。

「春くん？ちょっとお仕置きが必要みたいだね？#」

「春？覚悟はいい？#」

するとそのとき、ドアがバーンと勢いよく開き、テオドラが部屋に駆け込んできて、

「なんじゃ、なにやら面白そうなことをやっておるの。妾も混ぜよ。」

と、土下座をする春希に飛びついた。

「「ナ、ナンデモナイヨ？・・・ジロツ##」」

と慌ててオーラを引っ込め、春希を睨む二人。

「???? まあ良いかの。ところで春希となのはとフェイトはどんな関係なのじゃ？」

すかさず、

「「夫婦っ!!」」

と答えるなのはとフェイト。あまりの剣幕に少したじろぐテオドラ。だが、テオドラは恐ろしいことに爆弾を投下する。

「じゃあ、妾も春希の嫁になるのじゃ。良いな、異論は認めんぞ？」
と言い、またしても二人の前で春希にキスをした。

「「なっ」」

呆然とする二人。そしてまた黒いオーラを出し始め、今度は二人の怒りは頂点に達し、それぞれ魔王化、死神化したなのはとフェイトにデレデレした顔をする春希の意識は刈り取られた。

数日が経ち、三人は十分お世話になったと言って城を出た。テオはまたもごねていたが、また必ず会いにいくと約束してなんとかやり過ごしたが、最後にテオドラがまたしても春希にキスをしたために再び春希は二人に意識を刈り取られることになった。

それから少し経ち、三人は《紅き翼》が指名手配を受けたという知らせを聞き、作戦会議をしていた。

「昨日紅き翼に指名手配がかけられたっていうのが本当だったなんてな。」

「かけたのは連合側だからもし知っている通りならテオは・・・」
原作知識どおりならテオドラは、生きているはずだが、友人として知り合ってしまった以上、放っておけるわけがない。なので春希達は、知識どおりに、《夜の迷宮》に幽閉される際に助けることにしたのである。

「救出だけだから三人で行く必要はないかもだけど、心配だから三人で行こうか。」

「うんっ、行こう。」

「それじゃ、さっさとお姫様を救いに行きますか。」

この時が三人が表舞台に立つことになる最初のことであった。

修行、からのく大戦へ突入☆（後書き）

戦闘はまだですが、次回には入ります。

誤字脱字があったらすみません。

夜の迷宮へようこそ

side…《紅き翼》

よう、俺の名はナギ・スプリングフィールドだ。サウザントマスタ
ーとかいう名で呼ばれている最強の魔法使いだ。っても魔法は5、
6個しかおぼえてないんだけどな。

そんなことより、今俺たち紅き翼は指名手配をかけられちゃってん
だよ。

今回の戦争が気に入らなくてさっさと終わらせちまおうと思って参
戦して帝国を蹴散らしてたんだがな、どうもこの戦争を影で操って
る奴らがいるってのをメンバーのガトウがみつけたらしくってな、
そこでその組織を潰すのに協力してくれるっつう姫さん、名前はえ
ーっとアリカ……なんだっけ？ 長えからわすれちゃったよ。
まあ細かいことはいいんだよ。で、その姫さんと協力して証拠を集
めてたらなんとまあ大物が引っかけたんだわ、うん、マジで。姫
さんのほうは帝国内に協力者ができそうだってんでその交渉、で俺
らのほうは俺らの協力者のじーさんに今までに見つけた証拠を持っ
て会いに行ったんだが会ってみたらニセモノで、さらに罠にかけら
れて今までの味方だった連合側に指名手配を受けたって訳だ。そん
時にやべえと思ったんだが時既に遅く、姫さんも攫われちゃったん
だよ。それで今は、隠れ家で姫さんの居場所を探してるっつうここ
だ。

「しっかしよく、ガトウ達まだなのか？」

「ふふっ、そんなにアリカ姫が心配なのですか？」

俺のつぶやきに変なツツコミをいれてくるのは、アルビレオ・イマ、
通称アル、変態だ。

「まあ、心配っていえば心配だな。姫さん無茶ばかりするからな。」

「ガハハハ、お前に心配されるようじゃ姫さんも終わりだな。」
と俺にケンカを売ってくるこいつはラカン、ジャック・ラカン、バカだ。

「ああん？なんだ筋肉馬鹿、ケンカ売ってんのか？買うぞゴラア。」

「ああん？誰が馬鹿だよこの鳥頭、やんのかゴラア？ってかお前のほうが馬鹿じゃねーか。」
睨み合う俺とジャック。

「やめんか、馬鹿ども。今そんなことしている場合か。」

「まあこいつらは血の氣が多いからのう。仕方ないわい。」
と俺たちのケンカを止めようとする青山詠春と俺の魔法の師匠であるフィリウス・ゼクト。

「はんっ、命拾いしたな筋肉馬鹿。」

「ああん？こっちのセリフだ鳥頭。」

「やんのか？」 「上等だぜ。」

「だからやめろと言ってるだろう#」 「ふう、賑やかですね。」
「やれやれ」

俺とジャックのバカ騒ぎにそれぞれの反応を見せる三人。

「はあ、お主らもあやつらを見習って欲しいものじゃ。」

「ん？ゼクト、誰のことですか？」

お師匠のつぶやきにアルが反応する。俺らも気になってそっちを向く。お師匠はしまったっていう風な顔をしたが、アルの追求がしつこくて、渋々といった感じで口を開いた。

「30年ぐらい前じゃったかのう、ワシが旧世界をぶらぶらしとった時にたまたま会うてのう、男と女二人の三人なんじゃがのう、そやつらは本当に仲が良かったんじゃよ。それでなんやかんやでワシも仲良くなつてのう、じゃからその時のことを思い出しただけのことじゃよ。」

「なんでお師匠はそいつらを見習え〜なんていったんだ？」
俺は気になったので聞いてみた。

「うむ、まあお主らじゃったらいかの。えーつ、そやつらはそんなに魔力が多そうなわけでもなかったんじゃがのう、魔力の運用効率が、今までに会ったことがないほど桁外れに凄かったのじゃよ。じゃからお主にも少しは見習って欲しいと思っただけじゃよ。」

へえ〜、そんな奴等がいんのか。まあ俺のほうが強ええけどな。

「ならなぜ始めはあんな風なお顔をされていたのですか？今の話ならさほど問題はないのでは？」

とまたアルが聞いた。確かにそれもそうだと思った。

「それはのう、そやつらに平穏に生きたいからといって口止めをさ

れておったからじゃよ。」

それを聞いて俺は、笑ってこう言った。

「大丈夫だって。30年も前のことなんだからそいつらも平穩に暮らしてるって。それにお師匠の知り合いならいい奴だろうしそんな細けえことで起こったりしねえって。」

「ふむ、それもそうじゃの。あやつらはそんな狭量ではなかったの。」

するとその時、

「見つけたぞっ！」

といきなりガトウが入ってきた。

まさか、

「姫さんの居場所か？」

「ああ、……夜の迷宮だ。」

ガトウの言葉に、俺達は立ち上がり、隠れ家を後にした。

side…春希

春希達三人は現在、古代遺跡《夜の迷宮》から少し離れた所で、認

識阻害魔法をかけ、絶賛作戦会議中なう。

遺跡の入り口には、見張りと思しき魔法使いが数名。

「さて、中にも魔法使いはいっぱいいるだろうけど、どうやってお姫様を助けようか？」

「1人が潜入してテオちゃんの安全を確保して、残り2人で陽動、みたいな感じでどうかな？」

「うん、それが一番現実的かな。どう、春？」

「そうだね、でもそうすると、誰が潜入するかだけ……」
そして途端に黒いオーラを出す二人。

「「春は陽動だよ？」」

「デ、デスヨネ」

まあ、分かってたけどね。

「うーん、じゃあ、フェイトが潜入で、なのはは俺と陽動ね。細かい作戦は、……………で。」

しばらくして、

「ねえ、春？本当にこの格好で行くの？／／／」

そこには小学校3、4年生ぐらいの姿の3人がいた。

「ねえ、春くん、わたしもなんでこの姿じゃないといけないのかわ

「じゃあフェイトがテオのところに着くまで、俺たちは待機だね。」
と言って、なのはに抱きつく春希。

「ひゃあ、春くん、くすぐったいよ／＼／＼」
春希のいきなりの行動に、赤面するなのは。

「待ってる間に、こうやってなのは分を補充しようと思ったんだけど……嫌だった？」

「んっ、…嫌じゃないけど…ああんっ、…時と場所を考えようよう…ちゅっ」

なのはの言葉に、春希は服の隙間から手を入れて胸を揉みしだき、唇でなのはの口を塞ぐ。

「相変わらず可愛いよ、なのは。……9歳児だからできないのが残念だけど。」

何を、とは言わない、決して。そして巫山戯るのをやめない春希。

「／＼／んっ、……だ、だめだよ……フェイトちゃんにも悪いし…ちゅっ」

なのはは赤い顔で春希をたしなめようとするも、最後は自分からキス。

「まあ、そうだね、流石に巫山戯すぎかな？でも、こうやって抱きつくだけならいいよね？」

と春希はなのはを抱きしめる。

「うん、それぐらいなら、いいよ…私も抱きしめられるのは好きだから／＼／」

そして2人は抱き合い、お互いの唇を徐々に近づけていく。そしてまさに2人の唇が重なるうとしたそのとき、

『春、なのは、着いたよ。』

とフェイトからの念話が届いた。

『2人とも、なにかあったの？』

なかなか2人から返事がないため少し不安そうな声色のフェイト。

『いや、なんでもないよ。』

『にやっ、にやんでもないよ、フェイトちゃん。』

春希は無難に返すも、なのはは動揺して少し噛んでしまった。2人のそんな様子に、フェイトは女の勘で何かを感じとったのか、

『……あとでたっぷり聞かせてもらうからね、2人とも？それより、テオとアリカ姫は無事だよ。ついてるからそろそろ始めて。』

『了解、フェイト。妨害はそのまま、護衛を続けてくれ。頼んだよ。』

『フェイトちゃん、気をつけてね。』

2人はそういつて念話を切る。

「じゃあ、ボチボチ始めますか。」

そして2人はそれぞれ、なのはは大剣【シンの牙】を、春希は銃剣【ライオンハート】を取り出し、

「最初は魔法で入り口付近の敵を一掃して、あとは右のほうをなのはが、左のほうを俺が接近戦で蹴散らそう。」

なのはと春希は、殲滅魔法【アルテマ】を放つと、入り口付近の敵は全滅。そしてなのはは右側、春希は左側の敵にそれぞれ武器を構えて突っ込んで行った。

side..《紅き翼》

俺たちが《夜の迷宮》の裏口から侵入しようと作戦を練っていると、いきなり迷宮の正面入り口のほうから

ドオオオオオン

と馬鹿でかい爆発音が聞こえてきた。

「「「「なんだ?!」「」「」」」

と俺たちがそっちを見ると、物凄い爆煙が上がってやがった。

「魔獣でも暴れているんでしょうか?」

とアルが言うも、裏口の見張りの魔法使い達が正面入り口のほうに動きだし、裏口がガラ空きになったため、すぐさま突入することに。そして俺たちは《夜の迷宮》へと全力で向かっていった。

(姫さん、待ってろよ。今助けにいくからな?)

side…春希

ドオオオオオン

と突然正面入り口のほうから爆音が聞こえ、迷宮内に囚われているアリカとテオドラは迷宮が揺れているを感じた。

「なんじゃ、魔獣でも暴れておるのか？」

とテオドラは少し不安そうに疑問を浮かべる。それに対してアリカは、

「いや、これはおそろく……」

と答えようとしたところで、

バァァアンと囚われていた部屋の壁の一部が壊れ、そこから、

「よう、姫さん、迎えに来たぜ。」

と赤毛の魔導士、ナギが笑いながら現れた。

「遅いぞ、我が騎士よ。」

とアリカはナギに言うも、当のナギは？ 顔。だがすぐに状況を思い出し、2人を連れて脱出していった。

侵入経路を通って脱出するナギ達は、正面入り口のほうの一面の瓦礫の山を見てここは危険だと判断し、一度集まって全員揃ったかを確認するのをやめ、急いで隠れ家に転移していった。

『春、なのは、脱出は完了したからそろそろ離脱して。』
とフェイトが念話で連絡すると、2人も適当なところで切り上げ、
《夜の迷宮》から離脱していった。

夜の迷宮へようこそ（後書き）

春希ハーレムですが、今の予定でいくと

- ・なのは
- ・フェイト
- ・テオドラ
- ・木乃香
- ・刹那
- ・真名
- ・千鶴
- ・夏美
- ・裕奈
- ・アキラ
- ・千雨
- ・亜子
- ・エヴァ
- ・茶々丸

の14人でいきたいと思います。ただし、オリキャラ入れたり、他作品のキャラ入れたりして多少の変更はすると思います。一応上に書いてるのは確定ということ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3701z/>

転生+チート+オリ主でjump

2011年12月14日06時47分発行